

小學新撰修身書

安原時太郎 閱
平井義直 編纂

三

176
2
50

大日本教育會館		
一	四	一
一	五	八
册	號	函

東
所
一

K110.1
181
3

小學新撰脩身書

此卷ハ初等科第二年後期生徒ニ授クル為
ニシテ主トシテ長上ニ侍シ師傅ニ對シ親戚ニ
交ルノ則及ヒ妄リニ禽獸草木物品ヲ毀
傷ス可カラサルヲ教フ

小學新撰脩身書卷三

安原時太郎閱

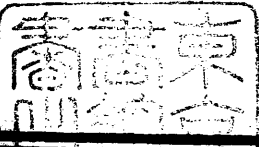
平井義直編輯

第一章

○父母に孝行する小次ぎ 長上

を尊敬するを 第二の教とす

長上とは 我より年長ぐ 又ハ



位高く 我の上小ある 人をい

ふかり 六諭衍義

○父かた母のこともに 一族の中
年たつた人をとど 夫々る禮義
を盡し 福んごるふすべし 聊
無禮いこまべつららば いかおれ
ご今乃世の人 親族の思うすく

して 長上を尊敬することを

知らざるや 同上

○他人小くいさむ 其年齢我の
父と同輩ある人をとど 父小準じ
て敬ふべし 我が兄と同輩ある
人をば 兄に準じて敬ふべし 同上
○坐する時も 下に坐し 行く

ときも あとよき行くべし か
つとめにも 長上をさし越ゆる
こと あるべからず 長上の前
ふく 口に任せて虚言し 興ふ
乗じて 戲まことするを 甚ど
無禮なる 同上

○古へより高位ある人 賢徳あ

る人 老年なる人 これを三川
の達尊として 天下小おし渡つと
敬ふべき人あり 同上

○凡そもろくの卑幼 事大小と
かく専らに 行ふこと哉 得る
ことあるれ 必命を尊長ふうけ

よ 齊家宝要

新編 齊家宝要 卷之三

○父母小孝順一 長上を尊敬するは 百行の首め 萬善乃原なり 人能くこゝろ道を盡し得まば 天地鬼神これをたさげ 親戚隣里これを重んず 同上

○尊長に侍坐せば 日常小敬んで 顔色をうかがひ 耳常小敬

んで 言論をき、 命ずる所あれば 起立は 五種遺規

第二章

○師ハ道をつたへ 業をさすけ 惑ひを解くゆゑ人なり 人生 れて知るも能小あらず たれを 惑ひあらしん まごふて師小従

はずんバ 其まどひたる 終に

とけい 韓文

○先生めせバ 諾をることおく

唯して起つ 礼記

○先生の書策琴瑟 前にあられバ

坐してうけす 戒めく越ること

おこのま 同上

○先生教を施こし 弟子これに

則とる 温恭ふして 其心をむ

なしふし 受る所を 其原をき

ため 善をみてハこまに從ひ

義をきいてハ則ち服さ 管子

○端身正坐 書籍筆硯等のもは

こかをとくところ 常あり 讀

むべきの書 用ふべきもの 従
容とり出し 翻亂せざ 已ふを
とりて 原所に置くべし

童子禮

○師の教をうけ 學問をる法ハ
善をこのこ 行をもつと常小志
とすべし 學問をるを 善を行
ふんがためあり 人の善をえて

る 我が身に取り行ひ 人小義の
ることとを 心にむべかりと思む

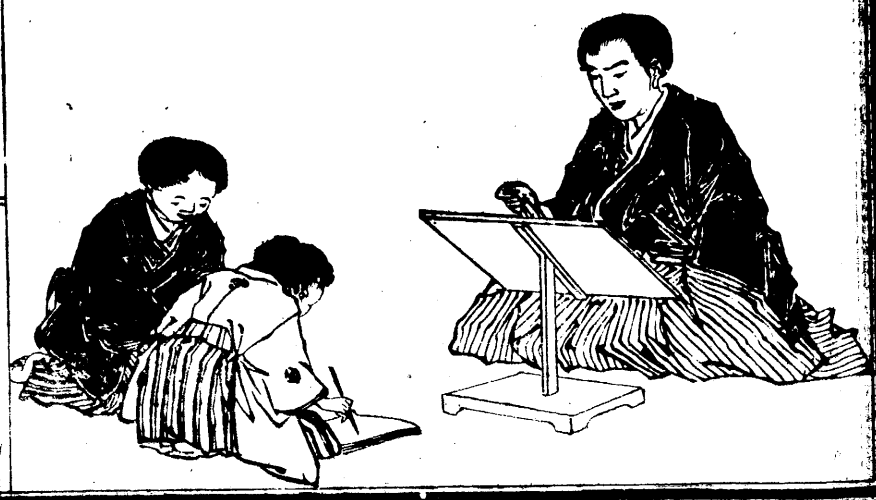
感して行ふべし

童子訓

○人の弟子とあり 師ふつて
ハ 我位たうといへども 高
ぶらず 師をたつとび敬ひて
たもんぎべし 師をたつとバガ

れバ 學問の道たゝす 師とる
 人 教を弟子に施さバ 弟子こ
 きふのつとりあらひ 師小對して
 顔色も心もやまらぬに 敬ひ
 つゝしみ 我心誠虚しくして
 自満なく 志まらる事も志らざる
 ごとくす 同上

○少年ふて師
 あひ 物をあら
 ふに 朝ハ師よ
 まあひ 晝ハ朝
 南なるむたる事を
 つとめ 夕べも
 かさねならひ



夜ふして口にいひ 身小行ひた
る事をかへり見て 過あまきバ
悔いて後のいましめとすべし 同上

第三章

○書に曰く九族を親しむ 詩小
曰く本支百世と 族を睦しふと
るを 聖人も且つ志あり 況や

凡衆人をや

齊家要

○分属卑しといへとも 齒ひ衆
小邁へたるも老あり 扶持保護
して 法かふるに 高年の禮を
以てす 同上

○一族のうち 賢者も本宗乃楨
幹ふれば こそきに親属し 出禮

を景行し 事毎にあらひ法とり
分を忘れ 年をおすきてこと
を敬同上

○中庸小ハ 親を志たくむの殺
賢をたつとぶの等 禮の生ず
る所ありといひり いふこゝろ
は 親類を志たくむハ仁あり

其内に 父子兄弟諸父從兄弟か
どの品あり 其親疎尊卑の 次
第たふしからざる 是れこそきを
志たくむの殺なり 賢をたつと
ぶハ義あり 人小大賢あり小賢
あり 才能ある人あり 舊識恩
徳ある人あり 其内小 大小高

小新異身書 卷之三

下の品あり 是れ賢をたつとぶ
此等あり 親類の品に應トて志
たしめ 大賢小賢の品によりて
敬ふハ 是れ禮の生ざるどころ
なり 五常訓

○親戚故舊朋友の まづ一きも
の 我の財物をからむ 己の力

に志たらしめて 財を與ふべし
借さべからず 與ふまじ 我の
仁愛の道行とて わづ心に快
し 彼も己が恩小感を 凡そか
る者ハ 貧しく財おき故にかる
かりて返せば いよく貧しく
ある 故小きとめて 廉直の人

に阿らざれども 返さること稀あり
初めかさば 恨むる少ふして
借りて後返さざるを ことなご
より乞ふ時 かれる者の恨怒る
甚どふあり
家道訓
○親戚故舊 かり貸しする所あ
まじき 力に随ふて ことまじ給與

はるに如かず 貸さと言ふとき
は わき其還さことを 望む索
むる所阿るを免さば 世範
○幼とは年稚し 弱とハ勢ひ鮮
し 人の欺きやまき所あまじ
これを矜み 處小随ふてことまじ
ため力を效せ 齊家宝要

○族属小親疎ありといへども
其源流を論せば ちかこれ骨肉
あり たとへむ大木のごとし
枝葉分析さとも 本同一根に
て 氣脉遠うらび 豈相うるこ
と 路人の如きことあらんや

真西山
勸諭文

家人をちるハ 多くハ婦女小
よる 婦女の隙ハ 多くハ黠婢
小いづ 婦ハ婢の語を聴くこと
かく 男ハ婦に言小惑ふこと
くんむ やむらぎ睦づく 漸を
以て敷ふすべき乎 許九杞
家則
○戸族中の人 饑寒の者 葬る

ことあたハざる者 嫁娶する所
をたげざるも然る 力をたかめて
周濟するを要す 一本の念を忘
れて 漠然として 心を關せざ
るべし 訓俗遺規
○曾子曰く 親戚よることむざれ
が 敢て外人に交らず 近きも

の志たしまさば 敢て遠きを
求めざ 小なる者審らざれ
ハ 敢て大をいさば 小學

第四章

○禮記小曰く 諸侯故あくして
羊をころさず 大夫故なを志と
犬豕を殺しとあるは 聖人

の意も こそ越好と玉とさるこ
とを悟るべし 悟窓漫筆

○禽獸蟲魚を みどり小殺さず
草木をも 時おらざればみ
だりにきらば 凡かやうのこと
を陰徳といふ 是人をあわれみ
物をめぐりて 天道小つらゆ

るの道かり

五常訓

○鳥獸蟲魚草木
も 皆天地の生
める物おれば
我ら同類小ハあ
らざれども 既
に人倫を愛して



是を恤むも 亦天地の恵み小
随ひて 天地小法らゆる道あり
をべてかゝのごとく 人倫と
萬物小情ふらきを 仁といふ初學訓
○飛禽走獸 人と形性を殊あり
といへどとと 聚るをよるこび
散らるをふくみ 生を貪り 死

を畏る 其情ハ則ち人とおかぢ
故小群を離るれハ 人よ向ひて
悲鳴し 庖小臨めハ哀蹄を 人
たるも此 胡ぞ己小反く 以て
之を思ハざるや 袁氏世範
○徐孝節といふ人 幼少より物
を殺さること戒いゆしめ 蟻の如

つまり居る處をも 踏殺さんこ
とをおそれ よけて道さゆかり
其心善あるといふべし 此心
をおくむるめて まづ父母兄弟
を愛し 人倫も及ぼし 次も萬
物も及ぼさば 仁愛は道 ひろ
く行はるべし

大和俗訓

○人の萬物の靈長くて 貴きもの
なきは 其やうかいものは 鳥
獸魚鼈草木よいとるまで そか
はる理もあると さなきはとてむざ
かに 殺さすべきもあらず 生類は
いふも及ばず 無情の木の實
草は實とくも かみくだき火も

くべ 生理を絶といふハ 天の
心にかかハざるなり 眞加訓

○一粒の米 一寸の紙も 大切
小きべー 粒米寸紙を粗末よす
る人ハ 必ぎ天罰を蒙り 身を
滅ぼし 家をわるほそ人あり
こ粒吝嗇よあらず 少量に非を

天物を暴殄せざる 大道あり 悟窓漫筆

○人の典籍器物をからバ こた
愛護すべし 一し決壊をること
あらずバ 補ひおさめてかへるを

唐話纂要

小 新撰脩身書卷三 終

明治十五年五月九日出版版權御願
同十五年五月三十日版權免許
同 年六月 刻成發兌

定價金六錢

京都府平民

編輯者 平井義直

上京區茅土組錦茶師町十一番戶

京都府平民

出版人 杉本甚助

下京區第五組辨慶石町六十番地

小學
新撰修身書

安原時太郎撰
平井義直編纂

四

176
2
50

大日本教育會館
一
四
五
冊
號
一
五
架
一
八
函

東
斤
一

K1101
181
4